

# ヨット部

設立	1967年7月
部長	休部中
現在の部員数	休部中
OB/OG 会代表者	浅野 公夫
OB/OG 会会員数	145人

## はじめに

慶應義塾大学工学部体育会ヨット部は、1967年7月に故北村宗彬慶應義塾大学名誉教授(当時講師)を初代部長として発足した。

藤原工業大学豫科誌創刊号によれば、それより遥か30年近く前の1940年7月、藤原工業大学時代にヨット部が創部されている。1941年5月7日には、藤原工大のヨット第一号が進水し、5月13日にヨット部が発足した。慶應義塾大学体育会ヨット部の協力を得て、藤原工大で唯一水に鍛える部として全工大生の海への関心を深めていた。その直後の戦争により中断となってしまったが、工大ヨット部が我等、理工体ヨット部の前身といえると思う。

1967年以降、理工体ヨット部(KEYYC)としてあらためて走り出したが、残念ながら現役の部員が集まらない事態が続き、1997年をもって一旦休部となり現在に至っている。部長は羽根邦夫、植田利久と引継がれた。

休部までの約30年間の活動の結果、OBは総勢145人となっている。今後もOB会は継続し、いつの日か現役が復活して再活動できることを願い、そのためにOBとしてできることをしていきたい。

慶應義塾大学工学部75年史の発刊にあたり、ヨット部OB会にて、1期の先輩を始め多くの諸先輩から、いろいろエピソードを集めた。その中で、初期(1968年前後)、中期(1975年前後)、後期(1988年前後)という形で、エピソードなど紹介させて頂きたい。また、過去発行した部誌から引用した故北村初代ヨット部長の手記も紹介したい。

(1990年卒 佐野博崇)

## ヨットとは

学生のヨットは、風のみを動力とするセーリング・ディンギーを使用したスポーツである。日本の大学のヨット競技は、おおむねどの大学も以下の二つのクラスを使用している。いずれも2人乗りで、主に舵取りを担当するスキッパーと、舵取り以外を担当するクルーのコンビで進める。2枚もしくは3枚のセール(帆)と舵を中心に操り、海上に設置されたブイ(マーク)を回って速さ(順位)を競うスポーツである。自然(風、波の動きなど)を考慮しながら、艇自体の調整と、微妙な操作、体重移動、コース取りなどが勝負になる、頭と感覚と体力をフルに使うスポーツと言える。

### ① 470(ヨンナナマル)級

技重視のクラスで、オリンピック競技になっている。

### ② スナイプ級

体力重視のクラス。



470級



スナイプ級

## ヨット部について

慶應には、我々以外にも次のようにヨットの団体がいくつかある。体育会／医学部体育会／サークル3つ／慶應義塾高校体連／他。

ヨットは専用の砂浜もしくはヨットハーバーから出艇する。未使用時はそこに陸置きし、土日や合宿中はその近くに合宿所を借りる生活をする。

我々ヨット部は、初期途中からは江の島のヨットハーバーを拠点に、春秋のレースシーズンのみ葉山という2箇所での活動となっていた。

ヨットは何年かの周期で新艇もしくはより程度の良い中古艇に買換える。また陸置き場所および合宿所を借りるには、もちろん費用がかかる。そのため部員は部としてアルバイトを行い、その費用を捻出した。また合宿中は自炊で、1年生が食事当番(食当)として、交代で1日数百円という予算内で栄養のある美味しい食事を作らなければならない。詳細は後の「ヨット部の生活」を参照して頂きたい。

スポーツとしてのヨットを堪能するだけではなく、合宿生活を通じていろいろなことを学べる良い場だったと思う。



江の島ヨットハーバー

## ヨット部の創世記（故北村宗彬先生）

< 理工学部体育会ヨット部誌「みずなぎ No.2」(1985年刊行)より引用 >

「初めに海があった。海は生き物、人間の産みの親、母である。」と私は信じている。海をこよなく愛し、高等商船学校航海科生徒となってから、駿河湾周航に備えて、毎日漕艇、帆走訓練に励んでいたが、終戦を迎え、私は父宗秀にならい教師となった。国語と英語の違いはあったものの、水泳、海が共に好きであったのは、土佐の海の近くで親子とも生まれたせいかもしれない。普通部海洋班のヨット訓練を手伝ったり、夏、金沢八景、久里浜、鎌倉、逗子などの海岸で、1時間300円くらいの貸ヨットを借りて走っているうちに昭和30年になった。その夏ミシガンの大学に留学。3年後に帰国したが、その後は研究、再渡米、語学教育研究所の仕事、欧州訪問等で昭和40年まで完全に海での戯れはもちろんのこと、総ての趣味が断たれてしまっていた。昭和41年、40歳を迎え、何かスポーツをしたい、と思ったとき、思わず選んだのがセーリングであった。

10年間のブランクがあったので、まず鑑摺(葉山あぶずり)で若い人達に混ざって逗葉ヨット部(慶應義塾大学サークル)の講習を受け、勘を取り戻すことに努めた。その時ただ一隻の古びたスナイプで何人かの工学部2年生が毎日、一生懸命練習をしている姿が目に入った。高橋君や浅野君である。聞けば、逗葉の部員であったが、7月の大切な工場見学や実験をさぼってでも練習に出て来いと言われ、とても無理な話なので、工学部ヨット部として独立することを目的に、練習を重ねているとのことであった。

秋が過ぎ、冬も去り、昭和42年の春になって例のグループから使者が来た。菊池君である。「北村先生、慶應義塾大学工学部体育会ヨット部の新設申請書を学生部に提出したいのですが、ぜひ部長になってくださいませんか。先生が去年ヨットに乗っていらっしゃるのを見たときから僕達は先生を部長に決めていたのです。」同好の志である学生からの頼み—嬉しかった。「喜んで。私に

も乗らせてくださいよ。」と答えた。「部長先生と一緒に練習する部なんて、まずありませんよね。工学部で、No.1の部にしましょう。ありがとうございます。」と言って菊池君は辞去した。

公認証を受け取ったのは7月早々で、少人数ながら、部として活動ができるようになったその夏は楽しかった。訓練にも励み甲斐があった。合宿所の向かいのよしず張りのスナック経営者の武田さんが、物凄く我々のことを気に入ってくれて、夜な夜なそこで昼の練習の疲れを癒したものである。ここでのエンターテナー部員は細身の福永君、彼は将棋が上手で、よく好手・妙手を教えてくれた。「桂、桂」と名前と呼ばれていた中野君も温厚でいて、張切りボーイであった。

練習中の思い出の一つは、野田君と乗っていて、ワイジャブ(ワイルドジャイブ)をしたときのこと。左右に大揺れする艇を必死に押さえて何とか沈(チン：ひっくりかえること)を逃れた。「高橋か浅野、岸壁で見ていたかな?! 大丈夫だろう。アブナイ、アブナイ。」

この創立の年、新入生の小林(健)君が春、始めから入部した。普通部で英語を教えたこともあって、特に嬉しかった。立派な体格、おおらかで真面目な性格、気持ちよく働き、動きまわる1年の新入部員を3年生は大切にされた。2年生不在の部であったが、初年度はやむを得ない。コーキングとバイトで乗艇回数と時間が少ないだけに、自分の番のときは一生懸命練習したようだった。雨の日には拙宅に集まって、テレビを観ながら部の発展を語り合ったことなども思いだされる。

1年目はまたたく間に過ぎ、昭和43年4月21日(日)の試乗会には18名が参加した。デラマンチャ(葉山のヨットクラブ)からY-15を、FCを普通部の上田先生からお借りし、計3隻で体験帆走をしてもらった結果、新3年1名(広田君)、新2年3名(清水君、小林(達)君、吉居君)、新1年8名(山崎君、桑原君、角田君、国尾君のほか4名。うち1名は女性)の計12名が入部した。これにより、総勢19名で、97(艇番)の1隻を頼りに2年目の活動を開始したのである。

<引用終わり>

## 初期(1968年前後)

KEYC(慶應義塾大学工学部体育会ヨット部)が最初に活動を始めたのは葉山の鑑摺のヨットハーバーだった。大学1年のときに逗葉ヨットクラブに所属していた僕は何とか工学部だけのヨット部を創りたくて同期の浅野、野田、中野、菊池らの賛同を得て、故北村部長の協力のもとに、逗葉から購入した1艇のスナイブを唯一の部所有の艇として活動を始めた。その艇もハル(船体)が割れていて、最初の数か月はコーキング(修理)に次ぐコーキングそして購入費用に当てるためのアルバイトに次ぐアルバイト、ヨット部というより工作部または今でいう日刊アルバイトニュース部みたいな感じでのこの部はヨチヨチ歩み始めた。鑑摺のハーバーでもまだ係留権が無く、何とか潜り込まなくてはならないので頭を痛めた。でも当たって砕けるで、日本酒を一升もってハーバースターの所に行ってほとんど詐欺師紛いのアレヤコレヤで何とか一艇分の係留権を手に入れた次第。

そんなコンナで始まった部だったが、3年から4年になるとときには艇も増え鑑摺では無理が多過ぎ、腰越のハーバーというより港に移動した。砂浜でのキツイ艇の上げ下ろしが懐かしく思い出される。さらにその後で、浅野が手を廻して彼と僕と2人で2艇のOKディンギーを置いてあった江の島のハーバーに、またまた言葉巧みに潜り込んで(僕達が卒業した後だが)現在まで来ている。考えてみれば、舌先三寸、日本酒一升から始まったヨット部である。

(1969年卒ヨット部1期 高橋利明)



ヨット部1期(1969年卒業アルバムより)

## 中期(1975 年前後)

私がヨット部に入った 1975 年の夏の合宿所は江の島の橋を渡り、そのまま商店街の階段を上った、山の中腹くらいの所だった。

確か野島タオルと呼んでいた記憶がある。そこは風呂が薪かなんかで、島の裏に木切れを探しに行ったことや、監視艇のエンジンを担いでハーバーを行き来したこと、食当として昼食用のサンドイッチを作成して往復したことを思い出す。

その夏、島のスピーカから流れていたのは太田裕美の「木綿のハンカチーフ」だった。

その合宿所は、流鏑馬と称した遊びやらでドタバタとうるさかったせいか追い出され、江の島の小田急駅近くの合宿所に移り、その後は、夏は江の島の橋のたもとの二見館(ふたみかん)を、また、春・秋は葉山の海岸から 5 分ほど奥に入った、一人暮らしのおばあさんの離れを借りて合宿を行った。

当時、スナイプ級は 21、14、50 で、470 級は J241、J607、J918。他に監視艇として通称「ウナギ」。先代の監視艇は、3 人乗れば沈んでしまうのではと思われる通称「潮騒丸」。名前は立派だが、噂では腰越海岸に捨ててあった船を使ったとの話も聞き、よく事故が起きなかったものと思う。事故といえば、台風のせいで真夜中、船を担いで葉山マリーナまで避難させたこともあった。

関東理工系リーグではそこそこの成績だったが、同じ技量でも新艇のほうが速いわけで、何とか新艇を買えないかと相談もしていた。

ヨット部のバイトは晴海のポートショー、ダンパ(ダンスパーティー)、江の島での TV 撮影のガード、ヨットスクールなど、華やかなアルバイトもあったが、地味に山本山のお歳暮の梱包、配送をしばらく行った記憶がある。それでも係留費など維持費だけで限界で、新艇購入は暫くあとになったと思う。

他にもいろいろ思い出されるが、この時代の我がヨット部は本当に懐かしい思い出が一杯で書ききれない。先輩も含めて当時のヨット部員のみなさんにあらためて感謝したい。

(1979 年卒 末長真二)



1976 年 練習風景。

J241 というセールナンバーが時代を物語る



ヨット部 11 期(1979 年卒業アルバムより)

## 後期(1988 年前後)

1980 年代、時代はバブル経済に湧いていた。しかし、我々ヨット部部員はバブルとはほど遠い合宿生活を送っていた。元来ヨットをやるには金がかかる。ヨットの置き場やセール代、合宿所の家賃や光熱費、ウエットスーツやドライスーツ、などなど。そのため合宿生活には金をかけられず、時代錯誤はなほだしい生活を強いられていた。トイレは汲取式、ご飯は大河ドラマに出てきそうな釜で炊いていた(標準価格米)。布団も年に一度しか干さないため非常に薄かった(干すと 3 倍位の厚さにふくれあがり、皆を驚かせた)。ダニも沢山いたが、そのせいかゆいのか、風呂に入っていないからかゆいのかよくわからない状態だった。また資金集めのために、引越や神社のお祭りのアルバイトを部員総出でよくやった。

そんな合宿生活だったが、このころの練習内容は実際の試合を想定した充実したものになっていた。そのためか優勝こそ無かったものの、理工



1985年 全塾レースの様子

系リーグ戦や塾内戦にてクラス別や個人成績2位を軒並み獲得し、部の雰囲気は勢いに満ちたものであった。女子で唯一4年間スナイプを起こし続けた「MARICO」が活躍したのもこの時代である。

また、リーグ戦を終えた合宿最終日に合宿所にて執り行われる「リーグ戦祝勝パーティー」では、OBも含め部員全員で盛り上がり、いまでも語り継がれる数々の逸話を残すことになった。

ところがバブル経済崩壊後は時代を反映してか、金のかかる割に貧乏合宿生活を強いられるヨット部に入る部員は年々減少を続け、部員、OB総出での部存続にける努力にも拘わらず、1996年卒の28期を最後に休部という形をとらざるを得なくなってしまった。大変残念である。

現在もおりにつけOB同士の会合を持ち、理工体ヨット部の復活をこころから願っている。ヨット部復活の暁にはOBとして現役部員たちを



江ノ島沖での練習風景 1989年



1987年関東理工系リーグ秋季大会  
470級個人第2位 木村・馬場組

しっかりバックアップできる体制を築き上げていきたい。(1988年卒 佐藤一郎)

前にも述べたように、ヨット部の活動には費用がかかる。そのため部員はアルバイトを行い、資金を稼いでいた。写真は、(社)日本舟艇工業会主催の1987年2月東京国際ボートショーで(晴海国際展示場)のアルバイトである。コンパニオンと一緒にご機嫌なヨット部員たちである。



東京国際ボートショーでのアルバイト 1987年2月

## ヨット部の生活

我々理工体ヨット部と他の部と大きく違うのは、練習よりも練習以外での時間の方が長く一緒にいる点である。1985年ごろどのような生活をしてきたか、まずは年間スケジュールから紹介する。

4月 新人勧誘。

週末江の島にて練習(6月まで)

週末練習は1日だけのときと土日合宿

5月 GW 新人歓迎合宿・慶早戦観戦

6月 総会

7月 下旬、ヨット教室開催

8月 中旬から4週間、月～金曜合宿(江の島)  
お祭りバイト(衣装を着て、山車を引いて町中を練り歩く)

9月 下旬、江の島から葉山に合宿所移動  
布団、調理器具などはレンタカーで移動  
テンダー、ヨットは回航  
葉山にて1週間合宿  
秋の理工系リーグ参戦

10月 週末江の島にて練習(11月ぐらいまで)  
世代交代のため低学年のスキッパー練習  
三田祭中の引っ越しバイト

2月 東京国際ポートショーのアルバイト

3月 春合宿(3週間江の島、1週間葉山)  
春の理工系リーグ参戦

このように長期合宿が9週間、その他土日合宿などもあり、この間は親と一緒にいる時間よりも部員と一緒にいる時間の方が長いのではないかなという生活になる。

1日の生活のスケジュールは以下のとおり。

### 【合宿初日】

08:20 ごろ 1・2年生合宿所集合

荷物をリアカーに積んでテンダー置場まで移動。テンダーにリアカー・荷物を積んでヨットハーバーまで移動。1986年からは2年生馬場君のおじいさんの軽バン(通称：バババン)の導入によりリアカーがなくなり1・2年生の負担が減る。その後テンダーも常時ハーバー置きになりさらに楽になるが、金銭面で厳しくなる。

09:00 ヨットハーバー到着。艀装準備

10:00 午前練習開始

11:30 午前練習終了

12:00 昼食(主にカップヌードル)。2日目からは食当が作ったごはん+αと麦茶

13:00 午後練習開始

15:30 午後練習終了

16:00 リアカーとともにハーバー出発。  
食当は買い出し、夕食の準備

18:00 夕食

19:00 ミーティング、セール補修など

21:30 消灯

20:00 食当、NHK ラジオを聴いて天気図作成  
【合宿2日目以降】

04:30~05:00 食当は朝食の準備

06:00 起床。朝トレーニング

07:00 朝食。前日作成した天気図も見ながら  
ミーティング

08:30 リアカーとともに合宿所出発

・・・この間は初日と同じ・・・

16:00 ハーバー出発。大渋滞の江の島大橋の真ん中をテンダーを押し突っ切る  
テンダー置場にテンダーを置き、荷物をリアカーにのせかえて、合宿所に戻り、荷物を置いて解散

合宿所は江の電の江ノ島駅近くに借りていた。6畳、8畳、2畳の畳の部屋に2畳ほどのキッチンと2畳の広縁(ここにセールを置く)とトイレである。風呂はないので、近くの銭湯に行く人もいれば、練習の後ハーバーの水道で…という人もいる。

合宿中の食事当番は1年生が担当する。米は各自1日3合分を持参し、米と調味料を除いて1日350円で切り盛りする。他校と比べるとこれでも贅沢な方らしい。米は朝0.8合、昼1.2合、夜1合で、味噌汁は毎食。夕食には肉100グラムと野菜とその他一品が義務付けられていた。ご飯は釜で炊くので、食事当番になりたての頃はダイヤモンド飯を作ったり、おかゆになったり。肉に下味で塩をつけて、油に塩を入れ、さらに皿に盛ってから塩をかけ、塩だらけのから揚げにして先輩に怒られたこともあった。今となっては本当に良い思い出、経験である。(1989年卒 木村英岐)

## ヨット部小史

卒業年	期	部員数	通番	主将	一〇 コメント
1969	1	6	6	高橋	1967年、鐘摺港のスナイブ1艇で創部。
1970	2	1	7	広田	
1971	3	3	10	小林	
1972	4	4	14	山崎	
1973	5	8	22	段谷	
1974	6	3	25	楠坂	
1975	7	4	29	益子	理工系リーグに本格参戦、かつて全日本でも活躍したスナイブ18682を購入
1976	8	5	34	田中	
1977	9	6	40	伊藤	夏は1ヶ月間、江ノ島で合宿。その間、休日は1日。強風で練習中止も、陸トレ。厳しかった。
1978	10	7	47	田代	スナイブ 14、21、50 470級 J214、J607、J918 監視艇通称ウナギ
1979	11	5	52	末長	新人時、暗海のポートショー、ダンパ主催等、華やかなバイトから、山本山の地味なバイト。
1980	12	6	58	小竿	470級918号が入るが、未だスナイブは全て木製。上位の成績取められず我慢の日々が続く。
1981	13	6	64	米沢	源春丸の源さんと知り合いになり、紹介されたマルイ肉屋となり合宿所を移す。
1982	14	7	71	金子	入部後、初の春の葉山合宿でダイヤモンド飯をだしたのはわたしです。(14期K。。。)
1983	15	7	78	浦上	午前中ベタ風、その後突然の大西の強風。1艇大破、1艇デスマスト。けが人がでなくて良かった。
1984	16	5	83	田中	TVによる練習風景等の放映や宿泊付スクールの実施などユニークなイベントもあり。
1985	17	5	88	武田	合宿所探しとセール代の資金作りに追われていた。。。
1986	18	8	96	坂野	春合宿で西風にやられて稲村沖にて一部船体放棄。その後、バイトを重ね艇を元通りに復活。
1987	19	4	100	黒部	18期のメンバーにも一部残ってもらい活動。秋期は特にスナイブで充実した戦績を残す。
1988	20	6	106	板垣	秋季理工戦470級個人(J1631)2位、団体総合2位。唯一の女性OGにちなんで、テンダーは「MARIO」と命名。
1989	21	6	112	馬場	470級のJ1631号が新艇J2476号へ。部員10名で理工戦の主幹をやりながら470個人2位など活躍。
1990	22	4	116	関根	470、スナイブとも3年生は春の理工系戦まで活躍。(残念ながら1991年卒の代は部員なし)
1992	23	10	126	長澤	文系部員入部により陣容急拡大。あと一步のところまでリーグ戦入賞を逃す。
1993	24	4	130	小川	バブル崩壊の中、超 極貧学生が集結。しか〜し！ローンを組んで新艇を買う。
1994	25	5	135	大澤	後期黄金時代の幕開け。470、スナイブ・チームともに快走。
1996	26	3	138	吉永	秘めたDNAが爆発。理工系リーグ戦 余裕の常勝チーム。
1997	27	1	139	坂口	体育会が敬遠される世相の中で、急速に陣容が縮小。資金繰りが厳しく。。。部員獲得に奮闘するも、維持できず休部となる。
1998	28	2	141	上田	

## 部員数の推移

